

佳作

君は私達の家族

東京都立両国高等学校附属中学校三年 西山 凜太郎

私がアメリカを出発したのは、現地時間の八月四日、午前五時だった。飛行機の関係で出発日の朝(夜中?)はとても忙しかった。しかし、私のホストファミリーは早起きして真っ暗闇の中、家族全員で見送ってくれた。「君は私達の家族よ」という言葉と共に。

私はこの夏、学校の修学旅行として初めてアメリカ本土に渡った。現地では一人一家庭にホームステイし、学校へ通ったり、ファミリーと休日を過ごしたりと、アメリカの日常を体験した。私の家族は、弟一人、同じ年一人、そして両親という四人家族だった。同じ年の男の子がいたということもあり、色々なスポーツと一緒にしたり、ゲームをしたり、コメディを見たりと、とても楽しく過ごす事ができた。しかし、そんな時間もあつという間だった。私達に

与えられた時間はたったの十日間。気づけば最後の休日になっていた。最後の休日の夜は全員が九時に寝た。次の日の出発が三時だったということもあつてか、いつもは夜でもうるさい家の中が、とても静かだった。そして出発の日。午前二時半に起きると、ファミリーは既に準備をはじめていた。私はホストマザーに袋を渡された。中身を聞くと、今日の朝ご飯だと教えてくれた。そして、別れの時間がきてしまった。ファミリーは最後に

「Thank you.」

とだけ言って抱きしめてくれた。その時、こらえていたはずの涙が少しこぼれてしまった。私は涙を隠してバスに乗り込み、ファミリーに手を振った。そのバスの中では、クラスメイトが写真を見せ合って、ファミリーとの休日について語り合っていた。空港に着いた後、皆で朝ご飯を食べた。ホストマザーが用意してくれた朝ご飯を。袋を開けて、中のパンを取り出した時、中から一枚の紙切れが落ちてきた。拾い上げたその紙には「君へのプレゼント」と書かれていた。私は袋の中をもう一度あさった。すると、一冊のアルバムが入っていた。そのアルバムの題名は『もう一人の家族』だった。中を見てみると、フ

ファミリーと共に過ごした休日の写真がたくさん貼られていた。そして最後のページにはファミリー、一人一人からのメッセージが書かれていた。ホストブラザー達は一生懸命練習したと言っていた日本語も書いてくれた。そのアルバムの一番最後に書かれていたのが「君は私達の家族よ」という言葉だった。私はおもわず泣いてしまった。ファミリーが抱きしめてくれた時に隠した涙も全て流れてしまうほど、泣いた。私は彼らと過ごした日々を思い出した。彼らの事を絶対に忘れないだろう。そう、彼らは、私のもう一つの家族だから。